

4. あなたがたが定期的に召集しなければならない聖なる会合、すなわち主の例祭は次のとおりである。
5. 第一月の十四日には、夕暮れに過越のいけにえを主にささげる。
6. この月の十五日は、主の、種を入れないパンの祭りである。
七日間、あなたがたは種を入れないパンを食べなければならない。
7. 最初の日、あなたがたの聖なる会合とし、どんな労働の仕事もしてはならない。
8. 七日間、火によるささげ物を主にささげる。
七日目は聖なる会合である。
あなたがたは、どんな労働の仕事もしてはならない。」
9. ついで主はモーセに告げて仰せられた。
10. 「イスラエル人に告げて言え。
わたしがあなたがたに与えようとしている地に、
あなたがたはいり、収穫を刈り入れるときは、収穫の初穂の束を祭司のところに持って来る。
11. 祭司は、あなたがたが受け入れられるために、その束を主に向かって揺り動かす。
祭司は安息日の翌日、それを揺り動かさなければならない。
12. あなたがたは、束を揺り動かすその日に、
主への全焼のいけにえとして、一歳の傷のない雄の子羊をささげる。
13. その穀物のささげ物は、
油を混ぜた小麦粉十分の二エパであり、主への火によるささげ物、なだめのかおりである。
その注ぎのささげ物はぶどう酒で、一ヒンの四分の一である。
14. あなたがたは
神へのささげ物を持って来るその日まで、パンも、炒り麦も、新穀も食べてはならない。
これはあなたがたがどこに住んでいても、代々守るべき永遠のおきてである。
15. あなたがたは、安息日の翌日から、
すなわち奉献物の束を持って来た日から、満七週間が終わるまでを数える。
16. 七回目の安息日の翌日まで五十日を数え、
あなたがたは新しい穀物のささげ物を主にささげなければならない。
17. あなたがたの住まいから、奉献物としてパン二個を持って来なければならない。
——主への初穂として、十分の二エパの小麦粉にパン種を入れて焼かれるもの——
18. そのパンといっしょに、主への全焼のいけにえとして、
一歳の傷のない雄の子羊七頭、若い雄牛一頭、雄羊二頭、
また、主へのなだめのかおりの、火によるささげ物として、
彼らの穀物のささげ物と注ぎのささげ物とをささげる。
19. また、雄やぎ一頭を、罪のためのいけにえとし、一歳の雄の子羊二頭を、和解のいけにえとする。
20. 祭司は、これら二頭の雄の子羊を、初穂のパンといっしょに、
奉献物として主に向かって揺り動かす。
これらは主の聖なるものであり、祭司のものとなる。

21. その日、あなたがたは聖なる会合を召集する。
それはあなたがたのためである。
どんな労働の仕事もしてはならない。
これはあなたがたがどこに住んでいても、代々守るべき永遠のおきてである。
22. あなたがたの土地の収穫を刈り入れるとき、あなたは刈るときに、畑の隅まで刈ってはならない。
あなたの収穫の落ち穂も集めてはならない。
貧しい者と在留異国人のために、それらを残しておかなければならない。
わたしはあなたがたの神、主である。」

説教

4. あなたがたが定期的に召集しなければならない聖なる会合、すなわち主の例祭は次のとおりである。

定例祭についての教えが列挙されます。

その最初は過越の祭りです。これは第1の月(太陽暦の3~4月に当たる)の14日の夕方に過越の小羊をほふり、その夜すなわち15日に(ユダヤの時間は日没から始まる)、ほふった小羊を、種を入れないパンと苦菜を添えて食べます。これが過越の食事です。種を入れないパンは、15~21日の7日間食べ続け、その間、家中のパン種を全部取り除き、種を入れないパン(別名「悩みのパン」)を食べなければなりません(7)。その第1日目と第7日目には聖なる会合が召集され、すべて労働は禁じられ、安息を守らなければなりません(8)。

この過越の祭は、かつてイスラエル人がエジプトを脱出した夜、神さまがエジプトにさばきを下してエジプト全土の初子をひとり残らず皆殺しにする中で、一方のイスラエルは、神さまの命令により自分の家の門柱とかもいに小羊の血を塗り、その血を見て神さまがその家の初子を打つことなく過ぎ越されたことを記念して、それを思い出し、自分たちの子孫に伝えるための祭りでした。その夜、イスラエルは、小羊の肉を、種を入れないパンと苦菜を添えて食べます。言わば、家族みんなでジンギスカンを食べるのです。苦菜は、エジプトでの奴隷生活の苦しみを忘れないためです。種なしパンは酵母菌で発酵して膨らんでいないパンのことで、南部煎餅のゴマの入っていない「味噌汁煎餅」のようなものです。

これを七日間来る日も来る日もひたすら食べ続けなければなりません(7)。どうしてでしょうか。エジプトを出た後、少なくとも一週間はひたすらエジプトから離れなければならなかったからです。後を振り返らず、一心不乱にカナンを目指して、ひたすら前進しなければなりません(7)。だから、ゆっくりしている暇はありません。未練がましく、エジプトの生活を懐古している暇はありません。パン種でパンをゆっくり発酵させて、(白神酵母だのフランス酵母だのと)美味しいパン作りをしている場合ではないのです。逃げなければなりません。ひたすらエジプトを離れて行かねばなりません。エジプトに未練を残さず、ひたすら前を目指して前進し続けなければならなかったのです。それで、「種なしパン」、つまり「即席パン」、「間に合わせのパン」を食べながら、生活のことに気をとられずに、ひたすら神さまのお導きに従って、一週間前進し続けるように、と神さまはお命じになりました。またそのため、出エジプトの夜は、「腰の帯を引き締め、足にくつをはき、手に杖を持ち、急いで食べ」なければなりません(7)。これから約束の地カナンまでの長い長い荒野の旅が始まります。だから、戦闘態勢を整え、臨戦態勢で、長旅の準備をして、「急いで」食べたのです。

「過越」ということばは、「容赦する」「(極力踏みつけないようゆっくりと足を上げて)通り越す」という意味です。どうして神さまは「かもいと二本の門柱」に羊の血を塗った家の罪を「容赦」してその家にはさばきを下されないのでしょ

神のさばきを受けて、エジプト人同然に殺されるからです。だから、神さまは「傷なき小羊」が流した「その血を見て」、彼らの所を「通り越す」と約束なさるのでした。

勿論、単なる一匹の獣が、本当に私たちを罪と滅びから救ってくれるということはありません。ヘブル書の記者は、「雄牛とやぎの血は、罪を除くことができない。」と証言します (10:4)。そして、この獣のいけにえのことを、来るべき「まことの小羊」の「影」と呼んでおります。ですから、これはあくまで単なる「あなたがたのためのしるし」(13)に過ぎないのです。「しるし」が指し示す「まことの小羊」、「世の罪を取り除くまことの小羊」は、モーセの時代から数えて二千年も後に世に来られるイエス・キリストさまです。イエス・キリストが、「傷のない」「まことの小羊」として、「過越の祭り」の日の、ちょうど羊が屠られる同じ時刻に、日没までのまさに「夕方」に、午後三時に、「過越の小羊」として十字架で死なれました。イエスさまこそが過越の羊です。世の罪を取り除くまことの小羊です。私たちの罪を贖う、過越の小羊です。御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめるのです。過越の祭りは、イエス・キリストにあって成就しました。ですから、今日ではキリスト教会は過越の祭りを祝いません。その代わりに聖餐式に与ります。それは、私たちがキリストの血によって罪赦されて、地獄の滅びから永遠のいのちへと救われたことを思い出すためです。

話を戻します。過越の祭りは、傷なき小羊の血によってイスラエルが罪贖われて救われたことを記念し、思い出すための祭りでした。イスラエルは、年に一度、七日間ひたすら苦菜を添えた種なしパンを食べながら、神さまが傷なき小羊の血によって罪を贖ってくださったことを思い出しました。七日目は「どんな労働の仕事も」休んで思い出しました。

週に一度、安息日を聖なる日として聖別して、神さまが救ってくださったことを思い出しましたが、年に一度は、一週間にわたって、種なしパンを食べながら、もっとじっくりと、もっと鮮明に、神さまの救いの恵みを思い出したのです。

9~14節では、一年が始まって最初の収穫をまず神さまにささげるよう命じられます。

9. ついで主はモーセに告げて仰せられた。

10. 「イスラエル人に告げて言え。

わたしがあなたがたに与えようとしている地に、

あなたがたがはいる、収穫を刈り入れるときは、収穫の初穂の束を祭司のところに持って来る。

11. 祭司は、あなたがたが受け入れられるために、その束を主に向かって揺り動かす。

祭司は安息日の翌日、それを揺り動かさなければならない。

ここでは種を入れないパンの祭りの第一日目の翌日ということになり、これはつまり日曜日になります。過越の小羊が屠られる受難日が金曜日で、その安息日の翌日とは要するに今で言う「イースター」に当たります。この時、収穫の初物を神さまにささげるよう命じられます。イスラエルでは雨期の2~3月に作物が成長して、3月あるいは4月のこの時期には大麦が収穫できます。そして、それから50日後には小麦が収穫できるようになります。それで、一年が始まって最初の収穫の初物をまず神さまにささげるよう命じられるのです。余り物じゃなくて、最初のもので、最も良い、最上の物です。それを神さまにささげるようにと言うのです。そして、初物を神さまにささげるまでは、収穫したものを食べてはならないとも命じられます。

14. あなたがたは神へのささげ物を持って来るその日まで、

パンも、炒り麦も、新穀も食べてはならない。

これはあなたがたがどこに住んでいても、代々守るべき永遠のおきてである。

それから七週間後(五旬節)には、再び、(今度は小麦の収穫の中から)初物を自分たちが通常食べるパンに調理して

「新しい新穀のささげ物」を神さまにささげるよう命じられます。

最初はとにかく初物を、次には同じ初物でも調理したものを、というのです。調理したものは、自分たちが普通食べているものを神さまにささげるということで、自分たちが普段食べているものすべては神さまが恵みにより与えてくださったものという告白にもなります。どちらも、日毎の糧を与えて生かしてくださる神さまの御恩を忘れることなく、むしろそれを思い出しては感謝する、というものでした。

穀物収穫はイスラエルの最も喜び溢れる時であったことでしょう。現代のサラリーマンなら給料日に、ということになるでしょう。給料をもらって、何でも好きなものを買うことができる、さあ、これから何を買って、何を飲み食いしようか、というまさにその時に、まずは神さまにささげ物をささげよ、その初穂を、一番良い物を、最善、最高のものを、まず神さまに感謝して、神さまにささげよ、というわけです。

そして、さらには、貧しい者を顧みる生き方が教えられております。

2 2. あなたがたの土地の収穫を刈り入れるとき、あなたは刈るときに、畑の隅まで刈ってはならない。

あなたの収穫の落ち穂も集めてはならない。

貧しい者と在留異国人のために、それらを残しておかなければならない。

わたしはあなたがたの神、主である。」

既にレビ記 19 章 9 節で学んだことですが、わざわざこの箇所にもこの教えが登場します。まず、落ち穂は貧しい者のために拾ってはなりません。それに加えて、がめつく畑の隅々まで刈り取ってはならず、むしろ、貧しい者のためにわざと残しておくように、というわけです。この意味は、自分たちもかつてはエジプトの奴隷で貧しかったじゃないか、滅びるしかなかった者なのに、神さまはこんな者を恵みによって救ってくださったじゃないか、まことの小羊の身代わりの血によって罪贖われ、罪赦されて、滅びを免れて救われたんじゃないか。しかも、日毎の糧を与えられて、こんなにも豊かに与えられて、これはすべて神さまの恵みによるんじゃないのか、神さまの恵みによって与えられて生かされているんじゃないのか、その恵みを忘れるな、ということです。それは、救われた恵み、そして、生かされている恵みです。

(今日私たちは過越の祭りを行いませんが) 私たちは、この恵みを聖餐式に於いて確認します。そして、毎週の礼拝に於いて確認するのです。

ここに集われた兄弟姉妹みなさんが、神さまの恵みにより救われた喜び、生かされた喜びを感謝をもって、神さまに初穂をささげ、貧しい者に施しをなして、神の栄光をあらわす生涯を生きていかれるよう、主の御名により祈ります。